現代大学生の友情とエロスについて
―「たかが友達、されど友達」―

甲南大学学生相談室　福井裕子・友久茂子・前田聖津子

1. はじめに

現在、青年期にある人々のみならず、かつて青年だった人々の胸にも、熱くせつない感情を呼び起こすいくつかの言葉がある。生きがい、情熱、恋、使命…、そして友情もそういう範疇に入る言葉のひとつであろう。

友情については、古来より実話に基づいた幾多の伝説や物語が生まれ、語りつくされてきた。しかし、他人事としての話を読んだり、聞いたりするのと、日常生活の中で自分に起こる出来事として体験するのとでは、こころに響く次元が全く違うことは誰でも知っている。

この古くて新しいテーマ－友情に加えて、青年期の人々の最大の関心事、特定の異性に向ける自分の中の愛の衝動－エロスについて改めて客観的に考えてみることは、簡単そうで実はなかなか難しいことである。それはどこか、人生という山道を登りながら時々は立ち止まって手元のコンパスで自分の位置を確認することと似ている。自分の判断を尊重することは先人の立てた道標を信頼することと同じか、たぶんそれ以上に大切なことである。

学生相談室ではこのテーマを、本年度の新入生に向けた講演会で河合隼雄先生に取りあげていただいた。予想通り、学生たちの関心は非常に高く、会場は満員となり、メモをとりながら熱心に先生のお話に耳を傾ける者も多くいた。文学部の松尾恒子教授はこの講演の感想をレポートとして提出することを学生に課された。今回、松尾教授のご好意によりそのレポートを学生相談室に提供していただいた。200枚にのぼるレポートを読み進むうちに、現代の学生が友情とエロスについて何を感じたり、考えたりしているのか、いくつかの興味深い点がでてきた。以下に、レポートの中の学生の言葉をそのまま引用しながら、特徴的な箇所を指摘し、現代の大学生の友情観・恋愛観を探り、ひいてはその社会的背景や学生相談室の存在意義についてもふれてみたい。

2. レポートの分析を通して

このレポートに先だち、松尾教授は教育心理学の授業に代えて、河合先生の講演を聴講するように学生たちに求められた。従って、レポートは教育心理学を受講している学生が書いたものである。レポートを出した学生は約200人であったが、講演の感想を自由に述べるという形式だったので、短すぎるもの、面白半分なものなど、書き手の熱意の感じられないものや、友情とエロスについて具体的な検討内容にまで踏み込めないものも少なからずあって、最終的には151枚のレポートを検討対象とした。

学生の性別は内訳は、男子55名、女子96名で女子が３分の２を占める。学部別では、文学部が99名で全体の65％を占め、理学部が30名で20％、あと法、経、営がそれぞれ７名前後である。学年別では２回生が119名で全体の８割弱を占め、あとは３、４回生である。全レポートのうち、約半数は文学部女子２回生が書いたものである。従って、高校を卒業し、大学生活２年目を迎え、20才の成人式をまじかに迎えるという年齢的背景である。

学生のレポートの中では、いくつかの共通した内容が記述されていることに気づいたので、それらを指標としてどれくらいの割合の学生がコメン

トしているかを調べてみた。また、先生のお話にあったにもかかわらず特にコメントの少なかった項目についても調べてみた。

まず、中学・高校時代の友人関係と現在の大学での友人との質の違いを挙げている者が151名中18名いた。自分自身の成長の過程を振りかえりながら、友達とどのようなつきあい方をしていたのか、それを支えるのはどのような友情の質だったのかを考察している。「高校までの友人関係の方が内面的こころのつながりがもてた」と述べた学生が多かった。さらに、高校までの友人関係の親密さは、同じ体験を共有していることをあげている学生が多い。高校までは地域的、時間的な同時性、そして学校・学級単位という、比較的狭い、与えられた環境の中で体験の共有を楽に得ている。

しかし大学生になると、地域的な広がり、多人数の中の一学生という立場の変化、学級制の破壊、そして先輩・後輩というタテの関係も加わってきて、明らかに人間関係は大きく広がったが、逆につながりは希薄になったと感じている。たとえば、ある女子学生は「新しい部類の友人として、顔見知り、行きの電車の中だけの友人、テスト前だけの友人、バイトや遊びで知り合ったその場限りで友達がいるので一人になる心配もなく、友人に干渉されることもない。自分が傷つくことも相手を傷つけることもない」と述べている。以上のこともふくめて、学生が気になっている主としたものは次の3点であろう。

①知り合いは多いが、内面のつながりは希薄な大学での友人関係

②体験を共有し友情関係にあふれていた高校までの友人との、卒後の疎遠さ

③大学のクラブの中での没個人の不可思議な人間関係

河合先生の、友人には場のつながりと個のつながりの二種類があるというお話には、151名中53名の学生がコメントしている。場のつながりで最も典型的なものは、高校まではクラスメイトだが、大学ではクラブ、サークルだといえる。しかし「クラブでは自分が無理しているように思える…クラブという集団の中にはいろんな人がいて、いろんな考え方の人がいると思うけど、クラブという輪の中に押しこめられて個人という単位が消えてしまっている」と述べた人もいた。クラブという場にいると、窮屈さを感じながらも表面上は皆にいつのまにか合わせてしまう…そんな「ああ、しんど…」という感じを思い当たる人はほかにもいた。

そして、河合先生が場のつながりの極論として引合いに出された、日本の同性間のつきあい方が外国人からみれば同性愛にみえるという話に対しては、151名中21人がコメントしており、そのいずれもが、自分たちの当たり前だと思っていた、社会のあり方の指摘は印象に残ったという記述であった。その中で、ある学生はクラブ活動やコンパの時の例をあげて「上下関係やグループ内の人間関係を保つため当然のこと」として、そのつきあい方を肯定している。

場と個のつながりについては、上述の通り約3分の1もの学生がコメントしており、そのほとんどが、「今まで人間関係を欧米人と比較したり、自分たちの人間関係が集団に合わせるものであると考えてみたことがなかったが、考えてみると、個対個としてつきあっている人は少なく、なんらかの集団の仲間としてつきあっている場合が多い」としている。その上で、「今後は個人対個人のつきあいができるように、自我を鍛えていきたい」と述べているものもいた。このように、場のつきあい、個のつきあいという分け方には、たいへん彼らの関心は高く、個と場の間で揺らぐ学生の姿が感じられる。

そのような中で、では真の友情とはなにか、どういう条件、定義をもって友情とよぶのかに関して興味深い点があった。まずレポートの中で、友情もしくは友人について語る語句を拾い上げていくと、4つの種類に分類できることに気づいた。

1）「信じる」「信頼しあう」「お互いに～」というように、信頼関係・相互関係を強調した語句を用いた人は151名中42名である。

2）「一緒に～した」「～が同じだった」など、何かの体験の共有、たとえばクラブ活動や委員会活動など、どちらかといえば苦しい体験をしたものどうしの感情の共有体験があることを意味する語句を用いた人は151名中21名である。

3）「安心できる」「わかってもらえる」「苦しい時に助けてくれる」「叱ってくれる」「心配してくれる」のように、受動態を用いて相手から受容されたり、甘えさせてもらったりする関係を意味する語句を用いた人は151人中24名である。

4）「友情とは～である。」という一般的な記述にとどまり、心情や実感の伴わないものは151名中42名、また自分の体験のみを述べるだけで特に客観的な定義づけのないものも数名いた。その具体的内容は、「価値観が同じ人」「利害関係をともなわない人」「客観的なアドバイスをしてくれる人」「長くつきあえる人」などである。

これらのうち、特に注目すべきは（3）の、相手の保護を求める人間関係であろう。「困った時、黙って力を貸してくれるような人」「何も言わなくても気持ちを分かり合える関係」「本気になって叱ってくれる人」などのコメントがあった。これらの人々は概して、コメントの他の部分で、「本当の親友はひとりだけ」とか、「本当の友情を育てるのはとてもむずかしい」とか述べており、おそらくある特定の友人をイメージして、友情・友人について語っているようだ。自分自身の過去の体験に基づいた言葉であろうが、それほどまでの深い理解をし合える友人を得ることは、実際にはなかなかむずかしいことである。一部の人々は、「親友と呼べる人がいないのは私がどこか心を開いていないからかもしれない」「“まごころ”とか“つくす”とかは、最近わたしの心から離れつつある言葉」「いつも不安で不安でたまらないという私は、本当に気を使わなくてよい友達がほしい」と述べて、友人のいない孤独感を訴えている。

このような友情は、男性間の友情、女性間の友情では変わってくるのだろうか。これについては、少数の人がコメントしているが、いずれも男どうしの友人は「気が合わないとすぐ別れてしまう。従って、関係がさばさばしている」「裏がなくさっぱりしている」とし、女どうしの場合は「何でも一緒に、同じことをすることを前提としている」「入学式など、何かの機会に一緒になると、グループとしていつまでもそれをひきずるので、関係は表面的ではないか」と考えている。

では、これが異性間になるとどうであろうか。異性間の友情は成り立つかということについて、151名中42名の学生がコメントしている。内、成立するという人は27名、成立しないという人は10名だった。総じて女性に成立する（或いは成立してほしいという希望的観測）という意見が多く、成立すると答えた27名中19名が女性だった。また、成立するための条件として「互いが友情として認識しあうこと」や「個人の価値観を大切にすること」をあげたり、「男女間の友情は成り立つと思うけれど、それにはお互いがエロスを抑えていることが必要」という記述もあった。しかし、中には「私は絶対成立すると思っていたが、今では簡単に結論を下すことができなくなっている」「自分に恋愛のパートナーができると今までのようにつきあえなくなる」「男だからその気持ちが強いのかもしれないが、好きな人ができれば身も心もひとつになりたい」「友情よりも愛情を大切にしたい」「友情と思っていてもそれが恋愛に変わることがある」「友情と恋愛の境界がわからない」など率直な気持ちを語っている者もあった。

友情に関して、今ひとつ若者の関心を引いたのが“裏切り”についての箇所だった。お互いの距離が近くなりすぎると、裏切りが生じるのはむし

ろ自然なことという先生のお話を聞いて、過去の傷ついた経験を整理し直したいという人は151名中20名、今後は人との距離をきちんととっていきたいという人はそれ以上に多かった。「裏切りは許せないとはただ一言には言えないということがわかった」「大切だからこそ裏切らなければならなかったという心理に深く考えさせられた」のように、若者らしいみずみずしい言葉で、裏切りの意味について各々が考え始めていることがうかがえた。

以上のように、筆者らが想像した以上に彼らは友情について真面目に考えていたが、その反面エロスについての記述は非常に少ない。少し裏話をすれば、河合先生ご自身も講演の中で話されたように、学生相談室が演題について考えていたとき、「友情だけでは、現代の若者の興味を引きつけることができないのではないか」ということで、「エロス」を付け加えたのであるが、学生たちの感想の中で約半数を上のぼる151名中82名の学生が何も記述していない。しかもエロスについてふれている残り69名の学生のうち「わからない」「体験がない」「むずかしい」という人が16名で、残りの人も先生の言葉をそのまま書いていたり、知識としての説明に終わっていて、積極的な意見や実感を述べたものはひとりもいなかった。また、友情とエロスは全く関係のない事柄としてとらえている学生も中にはいた。友情、恋愛、エロスの心理的な関係をどのように考えていけばいいのか、学生自身が戸惑っているように感じられた。

ロマンティックラブ、神との合一という話題については151名中21名がコメントしていたが、残り9割近くの人はこれをとりあげていない。コメントした21名についても、自分自身の問題として語ったり、体験に基づいた感想として表現した人は一人もなく、むしろ「神との合一なんてありえない」「ロマンティックラブは結婚すれば失われる」「愛によって人間は高まるのではないか」など自分自身の中で十分消化しきれないまま記述しているものがほとんどであった。恋愛というものを、神という存在を入れて新しい視座でとらえる話題提供にもかかわらず、現代の大学生はこの思想に、実感はもとより興味さえ抱かなかったといえるだろう。

3. レポートの結果から

古くて新しい課題である「友情」とは何か。一見そんな古くさい問題とは無縁のところに生きているように見える現代の若者であるが、彼らにとって授業の内容や単位のこと以上に深刻な問題かもしれない。このレポートで見るかぎり、筆者たちを唸らせるほど、友情について真剣に語り、真に結びつくとはどういうことかを自らの心に問いかけている若者は多かった。

友情・友人については、「お互いを鍛え合うもの」「人生を豊かにしてくれるのが友人」「意見を言いあってお互いを高める」などのように、別の人格、別の価値観をもったものとして認め、個として向きあうことを望み、理想とする関係を育て始めている学生もいる。しかしその一方で、筆者らが特に注目したのは、相手に対して全面的依存を求める人間関係を示唆する記述であった。つまり「困ったとき、黙って力を貸してくれるような人」「何もいわなくても気持ちがわかりあえる関係」「本気になって叱ってくれる人」といった表現である。これは友情というより、きわめて母性的、依存的関係とみることができる。対等の立場で語り合い、互いの主張をぶつけ合うというよりは、より情緒的で愛情希求に近いものであり、なんらかの未熟さを感じさせる。学内ではたくさんの友人と一見軽やかに生きているようにみえる若者も、心の奥底では基本的な安定感を満足させてくれる真の“理想的な（理想的すぎる？）友”、言い換えれば母的存在を渇望しているのかもしれない。このことは「甘え」の文化で代表される、日本的特徴といえるだろう。日本人的といえば、

友情の構成要素に「体験の共有」をあげたものも少なからずいたが、これは過去によく言われた「同じ釜の飯を食べた仲」と重複するものである。国際化時代といわれる現代を生きる若者であるが、西洋的な個の確立や自我のぶつかり合いという対等な友人関係のイメージとは程遠いものを抱いているのは印象的であった。

こういったことは河合先生の話の中で個のつながり・場のつながりとして語られたことであり、学生たちにとっては今までほとんど意識化していない問題だけに、非常に新鮮に受けとめているようである。場のつながりということで、誰もがまっさきに思い浮べるのはクラブ、サークルである。クラブは何らかの活動を通して他者との交わりがたやすく得られる「場」であり、1対1の個人的関係を開拓するより緊張感ははるかに少ない。村瀬孝雄は「キャンパスの症候群」（弘文堂、1981）の「退却しながらの自己確立」の中でサークル参加意義の調査をとりあげている。サークルへの入会動機では「居場所、友人、話し相手が欲しかった」という回答が多く、居場所の確保への強い要求をもつとする。また、サークルに定着し、居残った理由として「面倒をみてもらえる、受け入れてもらえる」という回答が多く、安息の場、甘えていられる場としての性格が強かったとする。本調査でも、学生が場と個のつながりの話に高い関心を寄せ、また友情の定義づけのところで、多くの人が相手から受容され、相手に甘えて依存できる関係を望んでいたが、これらは村瀬の指摘と対応するとみてよいだろう。いわば、村瀬はサークルという切り口で、本調査は友情という切り口で、現代の大学生の特徴的な一面を明らかにしたと思われる。

しかしながら、そういう場において、皆がリラックスしているのかというとそうでもないらしい。クラブには、体育会のようなメンバーが一丸となって高い目標をめざすクラブから、何をしてもよいし、何もしなくてもよいという構造のゆるい組織までいろいろあるが、組織力の強弱にかかわらず、クラブという場の人間関係に入ってしまうと、自分がなくなってしまうように感じる人が一部にはいる。なぜ、一部の人たちはクラブで心地よい所属感を味わい、他者との交流を互いに学び合う場としていけるのに、なぜ、一部の人たちは場のもつ求心力に引きこまれすぎて没個人的な息苦しさを感じてしまうのか。実際に、学生相談にあたる立場からみて、それには個人の性格と資質が深く関わっているように思われる。幼い時からの生育史の中で、自分のすることや考えることに対する自信、自己肯定感をもっていること、いいかえれば健康な自己愛を備えている人は、場の中で自己表現するときに不要な緊張がなく、他者との交流がスムーズである。しかし、親との長年の関係の中で、絶えず自分の欲求や感情を抑える傾向ができあがってしまった人は、中学高校での偏差値教育や受験競争を主な価値観として内面に必要以上に取りこんでしまう。いざ大学に入って、クラブ・サークルという人間交流が前面にでてくる場に入ったとき、従来自分を守ってくれた鎧はすでに通用せず、対人関係能力という新しい衣は未だ出来あがっていなくて、場のもつ求心力にひきこまれ、自分がなくなってしまうような危機感を覚えるのだろう。第2次ベビーブームである昭和40年代後半に生まれた現在の大学生は、最も厳しい受験競争を強いられてきたので、誰もが多少なりともこの傾向はもつと思われる。対人関係や修学面での不適応をおこして学生相談室を訪れる学生はごく一部ではあるが、潜在的に同質の問題はこの世代全体が抱えているといってよい。心と心の距離は、目に見えず、計るための確かな術もないので、時に人を不安に、孤独にさせる。クラブ・サークルにいると、場のつながりの力で、表面的には友人とともに楽しい時間をもてるし、大学では希薄になりがちな帰属意識ももてるので、そのことによって心の安定を保つことができよう。クラブ・サークルが、あるとき彼らの心の拠りど

ころとして、あるときは場のもつ窮屈さを感じたことをきっかけにそれまでの自分を見つめ新しい自分を築き直す場－まさにそういう「場」として機能していくことを期待したい。

次に、年代による友情の質的差異については、高校時代の友人関係の方がより緊密で、大学生になると利害関係で結ばれることが多いと感じている。これは、このレポートを書いた教育心理学受講者の大半が2回生であることによるのではないかと推測される。つまり1回生のときは受験勉強から解放されて、クラブや語学の友人と新しい人間関係をつくることに必死になっていたが、2回生になるともう一歩深い人間関係を求めながら、どこか踏み込めないものを感じているようだ。3回生になれば、クラブ内ではリーダーとして組織を動かす立場にあるし、ゼミへの所属感も出てきて、対ゼミ仲間、対教官との人間関係も深まってくるであろう。さらに4回生では卒業の見込みや就職活動が具体的になり、大学生活を価値あるものと見なしたいという気持ちの延長線上で、大学での友人について思い入れの強いレポートが多かったかもしれない。そういう意味で、2回生という年齢は、高校時代の熱い友人関係に逆戻りすることもできず、大学での友人とはまだ日が浅くしっくりこないという、どっちつかずの思いを多少は抱きながら表面上は親しげにふるまっている、そういう学年といってよいだろう。この傾向は3回生以上になれば、自分と同じ事に興味関心をもてる人と出会い、語り合うことで多少は解消される可能性もある。

男女差については、「男どうしの関係が深く、女どうしは表面的」といった表現をしていた学生もわずかにあったが、ほとんどの学生が特別な記述をしていない。このことは現代の若者の男どうし、女どうしの友情が等質化傾向にあり、それを自然な形で体験しているとみてよいように思われる。日本では古くから「男の約束」「同期のさくら」など男性の友情の深さを象徴したことばが多く、漱石や武者小路も「友情」の中で、エロスを全うすることと男の友情を重んじることの葛藤を描いている。しかし、男性の友情をことさら深いものとするその背景には、「男は外で」「女は内で」といった社会的枠組みによる制約を受けてきた影響があるのではないだろうか。今の若者のように、男女がほとんど同じように受験の洗礼を受け、同じように就職し、自分のまわりには同性の友人と同数ちかい異性の友人がいる場合には、友情の等質化が起こるのはごく当然といえる。むしろ最近の若者に人気のあるテレビドラマでみるように、男どうし、女どうし、そして男女の愛情も、非常に近い質を保ちながら、なお男女の愛情を全うしてゆかねばならない難しさがあるのかもしれない。

「日本人の同性どうしのつきあいが、欧米人にとっては同性愛にみえる」という講演の内容についても驚きをもって聞いたようだが、河合先生の言われる同性どうしのつきあいと、学生たちが思い描いた同性どうしのつきあいには多少のギャップがあることを、レポートの内容から感じとることができる。つまり、河合先生の言われる同性どうしとは、男女一緒のいろいろな場面で、男社会、女社会を作って別々の行動をし、それが時には肩を組み合ったり、手をつなぎあうこと、たとえば、仕事が終わって男性は肩を組むように夜の街に消えてゆき、女性は足早に家路を急ぐといった行動であろう。そのこと自体は40才代以上の者にとって、日本の文化として十分理解することができる。しかし、今の学生たちにとっては、クラブなどの枠の中では男社会、女社会を作る場合もあるが、自由な時間においては、男どうし、女どうしという感覚はあまりない。従って、漱石や武者小路が描いた固い「男の友情」など存在しないとさえいえよう。若者たちの行動でみる限り、男、女という意識すら存在していないのではないかと思われるふしがある。たとえば、旅行やスキーにいく場合、彼らにとっては男性の部屋と女性の部屋は必

ずしも必要ではない。共に語り合うひとつの部屋があればよいのであり、しかもそこにエロスが存在するのでもない。食事をしたり、お酒を飲むにしても、カラオケにいくのも、悩みを語り合うのも、決して男性だけの特権ではなく、男女が共にいることの方が、ごく普通のことと思われる。そのため、河合先生が指摘された同性どうしのつきあいをきわめて特殊な例として、サークルやクラブ活動を思いえがき「上下関係や、グループ内の人間関係を保つために必要なこと」としているのであろう。このように、同性どうしのつきあい方については、文化差以前に、若者たちが自分たちのつきあい方をどのようなイメージでとらえているのか、時代差による友情の質的変化を確認しておく必要があるだろう。

そういう中で圧倒的に興味を注がれるのが、男女間の友情が成り立つかどうかという問題である。異性を意識しないまま、男女が友情を通わすことが可能かどうか。幼い頃から男女が自由に、比較的性を意識することもなく育ってきた若者にとって、恋愛に発展する可能性がある異性との問題を考えるのはとても重要であり、かつ難しいことであろう。そのため情緒的な解決をするのでなく、「友情として認識し合う」とか「個人の価値観を大切にする」など知的に解決しようとしているのである。その原因が何によるのか明確に言いがたいが、思春期の中学、高校時代に勉強や受験という現実の中で、どこか、異性に対する情緒的な思いを抑圧したり、避けてきたりしていると考えることはできないだろうか。あふれんばかりの性情報の中で、自らの心にわきあがる異性への憧れや、胸ときめかす豊かな思いは、現実を生きるためにむしろ邪魔なものであり、育てることができないとすれば、やはり不幸なことであろう。

そのことは、エロスについてふれている数が非常に少なく、ふれていても、なお未消化なままで、非常に観念的であり、ほとんどの学生はどう扱ってよいかとまどっていたことからも伺い知ることができる。エリクソンの心理－社会的発達課題とその危機の概念によると、青年期の達成課題は親密感で、これに失敗すると孤独感に陥るとする。青年期の人々はこの親密さと孤独の体験を重ねながら、愛の能力を育てていくとされるが、実際には20才前後の人の心理－社会的発達程度は非常に個人差がある。愛の能力－エロスについても各々が未経験であったり、実体験の渦中にあったりして、自分の恋愛体験について冷静に語ることさえ出来ない年代である。まして、それをエロスとして一般化することはたいへん難しいことであろう。学生たちのエロスについてのとまどいは、そういう年齢的なことで無理があったことのほかに、エロスということばを理解しがたいということがあったかもしれない。確かに、エロスということばは我々日本人にはなじみが薄い。家庭で聞くことはほとんどないであろうし、学校教育の中で身体、ＳＥＸのしくみや機能を教えられることはあっても、人間関係としてのエロス－つまり、「誰と」「どのような気持ちで」性を媒介にした関係をもつのか－学ぶことはできない。しかも、巷で語られるエロスということばはかなり否定的なニュアンスをふくんでいる。レポートの中でも学生たちは、エロスという言葉からエロティシズム、エロティック、エロ本など成人むきの映画や雑誌へと連想を広げるものもいた。そうだとすれば、思春期を過ぎたばかりの若者にとって語りにくいことは十分理解できる。思えば、エロスという言葉にあたる適切な日本語の訳語はないし、我々の文化にはエロスを豊かに体験することを歓迎する風土もない。人の心の中、とりわけたましいに近いあたりにあって、とても大切なもの、秘密としておいておくもの、あいまいで不安をかきたてるもの、とらえどころがなく言葉で表現できないもの、甘く危険にみちたもの…そういう要素まで全てふくむエロスは、恋やセックスなどのより直截なものを日常語としている若者にとって、意識化も言語化も容易ではないと思われる。中に

は河合先生の言葉を受けて、「エロスとは神秘的なものである」とコメントした学生もいたが、エロスや同性愛といえば、すぐに「病気がうつるのはいやです」と書いていたものもあって、彼らの受けた異性への愛や性についての教育と体験がいかに貧弱なものであったかは想像に難くない。

もし彼らが、エロスの体験をわずかしかもたなかったとすれば、我々大人はこのことをどう受けとめればいいのであろうか。15才ぐらいになればほとんどの男女は大人の身体をもつようになる。受験にむけて知的な部分はどんどん詰め込まれるが、心の方は大きくならないままというのは、いわば体に合わない大きな衣服を着せられた子供みたいなものだ。受験という一代イベントが済むまでは、服の中で体が泳いでいることに気づかないほうが都合がよいかもしれない。けれどもわたしたちは、経験をもたないことや一度に多量の経験をすることがいかに危険であるかを知っている。植物が育つように、わたしたち人間も適切なときに適切な栄養や刺激を受けてこそ、健康に育つことができるのだろう。

このような「友情とエロス」にかかわる問題をかかえて、学生相談室を訪れる学生は少なくない。入学間もない学生の中には「友達ができない」とか「大学の中で居場所がない」などと訴えて来室するものが4、5月頃多くなる。今までの、なんとなく学級単位で過ごしていた世界から、ほとんど顔みしりのないだだっ広い世界に放り出され、「自分の教室」「自分の机」を見失って、孤独を訴える学生は毎年あとをたたない。そのような学生は、新しい環境の中での緊張感も加わって、学内に、人の中に自分が入り込むすきまを見いだせず焦る気持ちで来室する。なんとかその時期を乗りきってきた学生でも、自分の意見や見方や価値観を意識しはじめると、周囲の人間との距離のもち方が適度に保てなくなるときもある。さらに日がたつと、周囲の人が新しい環境に適応して独自の価値観や生活を見いだす中で、環境への適応もままならず、自分の生活そのものにすら自信をもてない状態になっていることもある。

人生の中で「友情とエロス」については、誰もが何かしら問題を抱えている。しかし、受容的でなんとなく渾然とした学級社会の中で暮らしてきた中学高校時代と、自ら働いて自ら養いかつ一個の家を築くという年代との中間地点として「大学時代」をとらえるならば、この自立を前にした時期に、友情とエロスの問題は非常に重要な意味をもってくると思われる。これを、なんとなく大学を中心とした社会や人間関係の中で考えていける学生と、時に立ち止まって自分をとりまく環境を見つめなければ、再び自立に向かって歩みだせない学生とがいる。そのような中で、学生相談は彼らの心の中であいまいに抱えられていた問題が意識化され、意味深く受けとめられるように広く働きかけると同時に、立ち止まってしまった学生のそばに寄り添って共にたたずむという役割を担っている。安心できる、守られた相談室という空間の中で、家族や周囲の人たちと自分との間でおこった重要な体験を思いだし、その意味をゆっくりと味わう。孤独を癒し、自信を取り戻して、再び教室や部室、そして人の中へと踏みだせる力を養う。彼らが自立に向かって巣立つ一歩手前で、羽を休めて力を蓄える場所に相談室がなれたらと願ってやまない。

4. おわりに

日頃、私たちは面接室にいて、じっくりとひとりの学生と向き合って過ごす。個人的な話を聞き込むにつれて、その人の問題はその人だけのことのように思ってしまう。しかし今回、この150枚余のレポートを読み進むうちに、ひとりの問題は全体の問題へとつながることをあらためて認識させられた。私たち3人が初めてこのレポートを手にした時、正直言って、こんなまとまりのない感想文の中から果たして何か出てくるものがあるの

だろうかととまどった。しかし今、まとまりのない自由な感想だったからこそ、少しずつだがいろいろなものが見えてきたのだと思う。友情とは？と自らに問うことは学生たちにとって人生の道標になり得たかもしれないし、私たちにとってこのレポートを分析することは、学生相談を続けていく上での確かな道標になった。レポートに真剣に取り組まれた学生の皆様と、レポートを快く御提供下さった、松尾先生に心から感謝の意を表したい。

ABSTRACT

On Friendship and Eros of Modern University Student

HUKUI, Hiroko; TOMOHISA, Sigeko; MAEDA, Setsuko
Konan University

This paper is the examination of the reports on friendship and eros of university students who attended the lecture of Dr. Kawai, Hayao. There were some problems of their human relationships in the university. They were confused at the gap between highschoollife and collegelife. They had difficulties not only in adjusting themselves to friends but also in asserting themselves. Few students wrote about eros, for the theme of eros is seemed diffcult for them to understand.

Key Words: friendship, eros, university student